

II-6 十和田市における骨粗鬆症リエゾンサービスの取り組み

○小笠原拳斗¹ 板橋泰斗¹ 坂本祐希子¹ 鈴木雅博¹
沼沢拓也²
(十和田市立中央病院整形外科¹ 八戸市立市民病院整形外科²)

2019年のWHO世界保健統計における平均寿命は、日本が男女とも世界1位(女性87.3歳、男性81.2歳)である。しかし、2014年時点での健康寿命との差は、女性で12年、男性で9年あり、介護を要することなく自立して全人生を全うすることは難しい。要介護になる原因として、認知症が19%で最多であるが、骨折・転倒が13%、および関節疾患が10%と、運動器疾患が原因となることも多い。また、骨粗鬆症により一旦骨折が生じると、1年以内に2次骨折を生じる割合が高く、さらに手術合併症の増加(骨癒合不全→感染→再手術等)や、早期変形性関節症の一要因であることが近年の研究で明らかとなった。しかし、運動器疾患は予防が可能な部分も多く、特に骨粗鬆症に対する検査・治療を継続して行うことは、高齢者の自立という観点からも意義のあることである。

骨粗鬆症リエゾンサービス(Osteoporosis Liaison Service: OLS)のリエゾンとは「連絡係」と訳され、診療におけるコーディネーターの役割を意味する。OLSの目的は、最初の脆弱性骨折への対応および骨折リスク評価と新たな骨折の予防であり、イギリスで1990年代後半から開始され、世界の国々で発展してきた。これは、多職種(医師、薬剤師、看護師、理学療法士、栄養士、医療クラーク)で包括的に骨粗鬆症患者の検査・治療を行っていくシステムであり、日本骨粗鬆症学会でその普及・推進を図っている。当科でも2016年よりOLSを立ち上げ、検診・骨粗鬆症外来での一次骨折予防、骨粗鬆症性骨折で入院した患者の二次骨折予防、市民講座などによる啓発等を行っている。2020年には国際骨粗鬆症財団によりその活動内容が認められ、日本で5病院目のGold levelの活動として認定を頂いた。

これまでの活動、および今後の課題について報告する。